鳥の劇場×シアター・ブレーキング・スルー・バリアーズ（TBTB）（米国）

『パックさんの魔法／美のことなり』第2回報告書〈稽古〉

森田かずよ

本稿はシアター・ブレーキング・スルー・バリアーズ（TBTB）来日からのクリエイションの内容について報告である。公演に向けてのクリエイションは前半が9月7日～12日、その後、TBTBによる第15回鳥の演劇祭での『BRECHT ON BRECHT音楽劇 ブレヒト、ブレヒトを語る』の上演を挟み、後半のクリエイションは20日～23日に実施された。

稽古は特に新作『美のことなり』に時間が割かれた。『美のことなり』は前半・後半によってキャストが分けられる。前半には、TBTBの女性の俳優2名、じゆう劇場の男性の俳優2名（アン・マリー・モレリ、ブリー・クラウザー、井谷優太、三好眞比郎）、後半にはTBTBの男性俳優2名、じゆう劇場の女性俳優2名（スコット・バートン、スティーブン・ドラヴィック、島田ひかる、石井優美）が出演した。

台本上の台詞も日本語と英語が混在しており、台詞を覚えることに困難が多いと予測され、実際の対面稽古までに、リモートによる読み合わせが行われた。文字情報だけでなく、TBTBと鳥の劇場の俳優が台詞を録音し、じゆう劇場の俳優にはその音声が練習用として共有される。じゆう劇場の俳優に対しては別途2回、自主稽古も実施された。

コロナへの対策

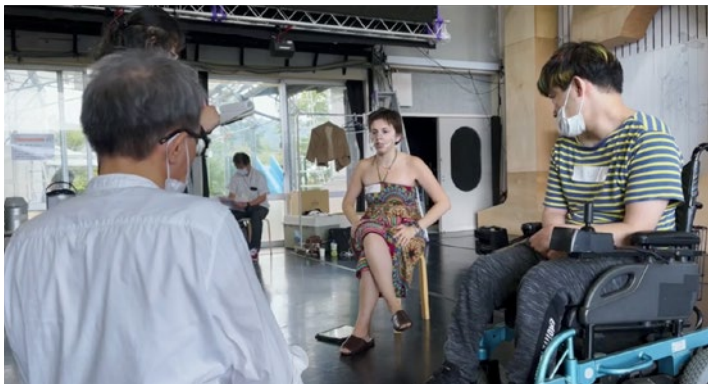
到着後、全員に対して抗原検査が行われた。じゆう劇場のメンバーには疾患を抱えている俳優もいるため、トイレを分けるなど、コロナ対策は特に念入りであった。TBTBには難聴の俳優が在籍し、口を読み取ることは重要となるため、透明マスクを使用した。

稽古内容について

稽古初日（2022年9月7日）

6日に鳥取入りする予定のTBTBのメンバーが入国手続きの混乱で羽田空港に足止めされ、7日朝に鳥取へ移動となった。全俳優およびスタッフが自己紹介し、『美のことなり』前半チームの読み合わせが行われた。ほとんどの俳優が台本を持った状態である。英語と日本語の台詞が交互に入り混じっているため、相手の台詞の終わりが読み取れず、どこを読んでいるかわからなくなるなど、全ての俳優において混乱が見られた。これは後半のグループでも同様で、最後まで苦戦していた。

稽古初日の様子



稽古の様子

『美のことなり』は、じゆう劇場の演出家である中島諒人氏、TBTBの演出家であるニコラス・ヴィセリ氏と分かれて稽古が実施された。

『美のことなり』は、4名の俳優のそれぞれの台詞が入り組んでいるが、俳優それぞれの台詞自体はモノローグである。ヴィセリ氏は俳優それぞれが持っている身体特有のエネルギーの素晴らしさを褒め、その上でひとりひとりが最初から最後までそのエネルギーを保ち続けることを求めた。また、4名のキャラクターは独立しているが、時に掛け合い、ユニゾンのように自由無碍に存在することも求めた。

中島氏はそれを踏まえ、稽古の中盤では、ひとりのモノローグを全部まとめて語らせる方法をとった。その指導もあって、それぞれの俳優はひとりの人物としての心の移り変わりを経験でき、より人格をくっきりさせていった。

稽古後半においては、感情が上手く表現できない俳優に対しては、中島氏は時に厳しい言葉を使い指導をした。中島氏がじゆう劇場について語っていた言葉通り、年齢や障がいだけで彼らを判断せず、等しく俳優であることの力量を問う姿を私は強く感じた。「俳優としてのクオリティーを問う」という中島氏の考えは、今後障がい者が俳優としての目指す方向を示唆する対応と考える。

集団としての助け合い

今回のコラボレーションにおいて、特筆すべき点のひとつとして、TBTBもじゆう劇場も長年劇団活動を行っている。じゆう劇場は障がいのある俳優、ない俳優が混在しており、その中には鳥の劇場で活動をする俳優も含まれている。長年の蓄積があるゆえ、メンバー同士が自然に助け合う様子が見られた。

クリエイション中のエピソードをひとつあげたい。じゆう劇場の俳優である井谷優太氏は脳性麻痺があり軽い言語障がいもある。日常生活や舞台においても電動車椅子を使用する。稽古の途中、鳥の劇場の俳優で、じゆう劇場にも携わる安田茉耶氏から「そろそろ車椅子から足を下ろしてやってみよう」とのアドバイスがあった。普段は車椅子の足置きに足を置いているが、足を地面に下ろし、踏ん張る方が滑舌はよくなるとの判断からである。これは長年活動を共にし、それぞれの身体状態を熟知し、相手の領域に踏み込めないとできないアドバイスであると私は感心した。舞台上で移動する場合、足置きに足を置く必要がある。ましてや、そのタイミングや段取りも必要であろう。そのあたりも安田氏がアドバイスをする様子が度々見られた。

じゆう劇場の中でも、この公演では知的障がいや精神障がいのある俳優が数名出演している。稽古中盤になると、台本をはなれ、会話と共に動きが要求され始める。「肩に手を置く。目を見る」など細かい演出がついていたのだが、じゆう劇場の俳優にとっては細かい指示を受けることにあまり慣れていない環境なのか、理解するのに時間がかかることもあり、少し戸惑いの表情が見られた。これはやむを得ないことだろう。「（頭が）混乱しています」という言葉を口にした俳優もいた。その場合も、活動を共にしてきたメンバーが、同じ俳優のひとりとして手を差し伸べる姿が印象に残った。